**パスカルの「３つの秩序」　　（S. 339. B.793. L.308）**

S: Sellier / B: Brunschvicg / L: Lafuma

**前田陽一、由木康訳『パンセ』　中公文庫　（ブランシュヴィック版）**

身体から精神への無限の距離は、精神から愛への無限大に無限な距離を表徴する。なぜなら、愛は超自然であるから。

——

この世の偉大のあらゆる光輝は、精神の探求にたずさわる人々には光彩を失う。

——

精神的な人々の偉大は、王や富者や将軍やすべて肉において偉大な人々には見えない。

——

神から来るのでなければ無に等しい知恵の偉大は、肉的な人々にも精神的な人々にも見えない。これらは類をことにする 三つの秩序である。

——

偉大な天才たちは、彼らの威力、彼らの光輝、彼らの偉大、彼らの勝利、彼らの光彩を持ち、肉的な偉大を少しも必要 としない。彼らの偉大は、肉的な偉大と何の関係もない。彼らは目では見えないが、精神で見える。それで十分なのだ。

——

アルキメデス(1)は、この世の光輝はなくても、同じように尊敬されたであろう。 彼は目に見える戦争はしなかった。だが、すべての精神的な人々に、彼の発明を提供した。ああ、彼は精神的な人々に対して いかに光輝を放ったことか。

——

イエス・キりストは、財産もなく、学問の対外的な業績もなく、その清浄な秩序のなかにおられる。彼は発明も授けず、 支配もしなかった。だが、謙虚で忍耐づよく、清浄で、神に対しては清く、悪魔に対しては恐るべく、少しの罪もなかった。 ああ、知恵を見る心情の目を持つ人々にとって、彼はいかに偉大な壮麗とすばらしい豪華とをもって来臨されたことであろう。

——

アルキメデスにとっては、その幾何学の書物のなかで王公のようにふるまうことは、よし彼が王公(2) であったとしても、無用であったろう。

——

われわれの主イエス・キリストにとっても、その清浄な世界において照り輝くために、王として来臨することは無用であった であろう。だが、彼は彼の秩序にふさわしい光輝をもって、そこに来られたのだ。

——

イエス・キリストの卑賤を、彼が来臨して現そうとされた偉大と同じ秩序のものであるかのように考えて、つまづくのは、 笑うべきことである。

この偉大を、彼の生涯、彼の苦難、彼の微賎、彼の死、弟子たちの選定、彼らからの置き去り、彼のひそかな復活などの うちに見るがよい。人はそれがいかに偉大であるかを知り、そこにありもしない卑賤をつまずきの種にするようなことは あるまい。

——

しかし、世には肉的な偉大にのみ感心して、精神的な偉大などはないかのように思っている人々があり、また精神的な 偉大にのみ感心して、知恵のうちにさらに無限に高いものはないかのように、思っている人々がある。

——

あらゆる物体、すなわち大空、大地、その王国などは、精神の最も小さいものにもおよばない。なぜなら、精神は それらのすべてと自身とを認識するが、物体は何も認識しないからである。

——

あらゆる物体の総和も、あらゆる精神の総和も、またそれらすべての業績も、愛の最も小さい動作にもおよばない。 これは無限に高い秩序に属するものである。

——

あらゆる物体の総和からも、小さな思考を発生させることはできない。それは不可能であり、ほかの秩序に属する ものである。あらゆる物体と精神とから、人は真の愛の一動作をも引き出すことはできない。それは不可能であり、 ほかの超自然的な秩序に属するものである。

« Les trois ordres », *Pensées*, éd. Sellier, fr. 339.

«  La distance infinie des corps aux esprits, figure la distance infiniment plus infinie des esprits à la charité, car elle est surnaturelle.   
 ——————  
 Tout l’éclat des grandeurs n’a point de lustre pour les gens qui sont dans les recherches de l’esprit.  
 ——————  
 La grandeur des gens d’esprit est invisible aux rois, aux riches, aux capitaines, à tous ces grands de chair.   
 ——————  
 La grandeur de la sagesse, qui n’est nulle sinon de Dieu, est invisible aux charnels et aux gens d’esprit. Ce sont trois ordres différents. De genre.   
 ——————  
 Les grands génies ont leur empire, leur éclat, leur grandeur, leur victoire et leur lustre, et n’ont nul besoin des grandeurs charnelles, où elles n’ont pas de rapport. Ils sont vus non des yeux mais des esprits, c’est assez.   
 ——————  
 Les saints ont leur empire, leur éclat, leur victoire, leur lustre, et n’ont nul besoin des grandeurs charnelles ou spirituelles, où elles n’ont nul rapport car elles n’y ajoutent ni ôtent. Ils sont vus de Dieu et des anges, et non des corps ni des esprits curieux, Dieu leur suffit.   
 ——————  
 Archimède sans éclat serait en même vénération. Il n’a pas donné des batailles, pour les yeux, mais il a fourni à tous les esprits ses inventions. Ô qu’il a éclaté aux esprits !  
 ——————  
 Jésus-Christ sans biens, et sans aucune production au-dehors de science, est dans son ordre de sainteté. Il n’a point donné d’inventions. Il n’a point régné, mais il a été humble, patient, saint, saint, saint à Dieu, terrible aux démons, sans aucun péché. Ô qu’il est venu en grande pompe et en une prodigieuse magnificence aux yeux du cœur et qui voient la sagesse !  
 ——————  
 Il eût été inutile à Archimède de faire le prince dans ses livres de géométrie, quoiqu’il le fût.   
 ——————  
 Il eût été inutile à Notre Seigneur Jésus-Christ, pour éclater dans son règne de sainteté, de venir en roi. Mais il y est bien venu avec l’éclat de son ordre.   
 ——————  
 Il est bien ridicule de se scandaliser de la bassesse de Jésus-Christ, comme si cette bassesse était du même ordre duquel est la grandeur qu’il venait faire paraître.   
  
 Qu’on considère cette grandeur-là dans sa vie, dans sa passion, dans son obscurité, dans sa mort, dans l’élection des siens, dans leur abandonnement, dans sa secrète résurrection et dans le reste. On la verra si grande qu’on n’aura pas sujet de se scandaliser d’une bassesse qui n y est pas.   
 ——————  
 Mais il y en a qui ne peuvent admirer que les grandeurs charnelles, comme s’il n’y en avait pas de spirituelles. Et d’autres qui n’admirent que les spirituelles, comme s’il n’y en avait pas d’infiniment plus hautes dans la sagesse.  
 ——————  
 Tous les corps, le firmament, les étoiles, la terre et ses royaumes, ne valent pas le moindre des esprits. Car il connaît tout cela, et soi, et les corps rien.   
 ——————  
 Tous les corps ensemble et tous les esprits ensemble et toutes leurs productions ne valent pas le moindre mouvement de charité. Cela est d’un ordre infiniment plus élevé.   
 ——————  
 De tous les corps ensemble on ne saurait en faire réussir une petite pensée, cela est impossible et d’un autre ordre. De tous les corps et esprits on n’en saurait tirer un mouvement de vraie charité, cela est impossible, et d’un autre ordre, surnaturel. »[[1]](#footnote-1)

参考

「すべて愛(Caritas)にまでいたらぬものは表徴である。聖書の唯一の目的は愛である」（S. 301,B６７０, L.270）。

Tout ce qui ne va point a la charité est figure

-------

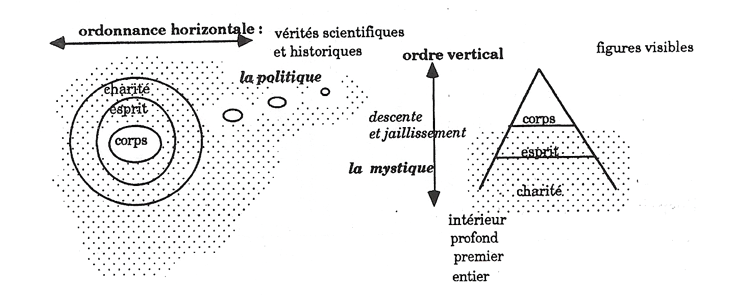
L’unique objet de l’escriture est la charité.

「人は真理をすら偶像にする。なぜなら、愛を離れた真理は神ではないからである。それは神の影像であり、偶像であって、愛すべきものでも、拝すべきものでもない」（S. 755, B.５８２, L.926）。

On se fait une idole de la vérité même, car la vérité hors de la charité n’est pas Dieu, et est son image et une idole qu’il ne faut point aimer ni adorer, et encore moins faut‑il aimer ou adorer son contraire, qui est le mensonge.

**パスカルの「三つの秩序」**　　テキストは別紙(「三つの秩序」)参照

**１　　物(身体)　　　２　　知性（精神）　　　３　　愛　（Caritas）**

****

****

**３つの邪欲**「すべて世にあるものは、肉の欲、目の欲、生活の奢りでいある。Libido sentiendi, libido sciendi, libido dominandi.　感覚欲、知識欲、支配欲」(B. 458) （ヨハネの手紙１, 2, 16）

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 肉の欲 | 目の欲 | 生活の奢り |
| libido sentiendi | libido sciendi | libido dominandi |
| 感覚欲 | 知識欲 | 支配欲 |
| 情欲、物欲 | 好奇心 | 傲慢 |
| 身体の次元 | 精神（知性）の次元 | 心（意志）の次元 |
| 貞潔、清貧 | 正しく疑う事、従う事 | 謙虚であること、愛、信頼 |

B. 460, B.377

***パスカルのアプローチの特徴***

* **「信仰には３つの手段がある。理性と習慣と霊感とである。」**(254)
* **実存的アプローチ**　理性（精神）の役割も習慣（身体）の役割をも無視せずに、それらを生かして、人間存在全体を意志（心）の決断によって方向付けようとする。

しかし、霊感は神との出会いと交わりによってしか与えられない。

* **理性の役割**＝人間の二重性と不条理、理性自体の力の限界の認識。  
  　「二つの矛盾する理由。そこから始めなくてはいけない。」(567)

「理性の服従と行使、そこに真のキリスト教がある」(269)

* **習慣の役割**＝「機械」を整えること。「自己愛」（エゴイズム）のメカニズムと反対の習慣をつけることによって、「邪欲」のメカニックな束縛から心を自由にする。  
  体が精神を助ける。心身の一致。
* 心と霊感（恩寵）の役割＝存在全体を他者に開いて交わる。

　「信仰と証拠は違う。後者は人間的であるが前者は神の賜物である。」(248)

—以上は信仰の秩序から見て肯定的な場合で、それぞれについて反対の状態がある。

* トマス・アキナス　「恩寵は自然を破壊せず、かえってそれを前提としてそれを完成させる。」

***パスカルの神学的ビジョン***

見えるもの　　　➡　　　　　　／見えるものと見えないもの　　➡／見えないもの

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 自然（本性）  (la nature) | ＋恩寵 (la grâce)　　　➡  超自然　（le suranturel） | 栄光 |
| 身体／精神（知性）／心（意志）  習慣／理性／  耳から聞く事／証拠／しるし、知恵  　＜愛と霊感を受け取る器を準備する道具（踏み台）となる場合もあれば、 躓きの石となる場合もある。 | ＋愛(la charité)  ＋霊感  　聖性(la sainteté) | 愛 |
| 表徴　 （見える部分だけを問題にする時）  文字  旧約聖書（預言）  「肉的なユダヤ教徒」の状態  字義的意味（自明さ）一元性  　（自然の光）  苦しみ  傲慢と罪 | ＋信仰 （覆い隠されている真実を受け取る）  愛という完成に向かう希望➡  ＋霊  ＋新約（福音）  「霊的なキリスト教徒」の状態  明暗（暗さと確かさ）両義性  　　（信仰の光）  苦しみと慰め  謙遜と恵みの力の結合 （ゆるしと贖い） | 至福直感 （すべての現実が見える。）  神自身とまみえ、交わる  天国の福者たちの状態  (完全な光)  至福 |
| 創造と堕落  　（アダム）  救い主を待ち望むユダヤ教徒 | 受肉と贖い  （キリストの第一の来臨）  惨めさによって身を低くする  「十字架の死に至るまで身を低くした神」  ⇒聖霊が人々に広がる（聖性）  栄光を待ち望むキリスト教徒⇒ | 終末  （第二の来臨）  栄光による高揚  ⇒ |

　　　　　　　　　　すべて相対的なもの　　　　　　　　　　⇒　　唯一絶対的な現実

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　目的＝愛

〈つねに―すでに〉と〈いまだ―ない〉の間にある緊張関係とダイナミスム

1. S. 339. [↑](#footnote-ref-1)